



「第一次共産党」史論 シヨナルのはざまでー

ー帝国日本とインターナ

黒川, 伊織

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2010-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5092

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005092>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	黒川 伊織
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 5092 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	2010 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

「第一次共産党」史論 ―帝国日本とインターナショナルのはざまで―

審 査 委 員

主 査	准教授	宇野田 尚哉
	教 授	王 柯
	教 授	萩原 守
	神戸大学名誉教授	須崎 愼一
	一橋大学名誉教授	加藤 哲郎

論文審査の結果の要旨

氏 名	黒川 伊織		
論文題目	「第一次共産党」史論 — 帝国日本とインタナショナルのはざまで —		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	准教授	宇野田 尚哉
	副 査	教授	王 柯
	副 査	教授	萩原 守
	副 査	神戸大学 名誉教授	須崎 慎一
	副 査	一橋大学 名誉教授	加藤 哲郎

要 旨

本論文は、1920年代前半の日本に存在したいわゆる「第一次共産党」について、その歴史を新出史料によって描き直すとともに、その歴史的経験を第一次世界大戦後の世界史的同時代性のうちに位置づけ直そうと試みた、意欲的な研究である。

本論文の第1の特長は、ソ連崩壊後の新出史料であるコミンテルン文書の博搜と精査に基づいて、第一次共産党についての通説的理解を全面的に書き換えたことである。従来、第一次共産党については、当事者の自伝・回想録や官憲文書によって研究するしかなかったが、著者は、ソ連崩壊後に利用可能となったコミンテルン文書のうちの日本共産党ファイルという一級史料を丹念に分析し、この主題についての通説をなしてきた犬丸義一『第一次共産党史の研究』を乗り越える叙述を行った。

本論文の第2の特長は、これまで第一次共産党に向けられてきた関心のあり方についてのメタヒストリカルな検討を徹底して行っているという点である。著者は、第一次共産党についての通説的理解の原型は1930年代初頭の日本共産党公判闘争において成立し戦後へと継承されたのであることや、第一次共産党に対する評価はこれまで32年テーゼ／講座派理論の枠組を適及的に適用することによって

なされてきていることなどを説得的に指摘する。そして著者は、そのようにして第一次共産党についての既存の理解をいったん括弧に括ったうえで、その中心的理論家だった山川均が唯物史観を受容し日本史研究へと適用して同時代の日本を「原内閣成立＝ブルジョア政権確立」と捉えるにいたるさまを詳細に跡づける。このような著者の分析は明快であり、1920年代初頭の思想史の研究への大きな貢献となっている。

本論文の第3の特長は、第一次大戦中におけるソヴィエト・ロシアの成立とその後におけるコミンテルンによる革命の輸出、第一次大戦を契機とした被抑圧民族による抵抗運動の高まり、第一次大戦を契機とした日本における社会運動の高揚と第一次共産党の成立、といった事柄を、第一次大戦後の世界史的同時代性のなかで連関させて捉えようとしているという点である。著者は、従来の第一次共産党史研究が一国史的枠組へと収斂しがちであったことを批判しつつ、そもそも第一次共産党はコミンテルンによる極東への介入が中国人・朝鮮人の密使に媒介されて日本にも及んだことにより成立した組織であることを強調するなど、第一次共産党の成立を帝国日本の支配秩序と国際共産主義運動とが相克する地点に捉えて、第一次共産党史をコミンテルンの極東への介入やその指導下での中国人・朝鮮人共産主義者の活動と不可分なものとして描き出した。この点は、従来の研究の限界を踏み越えた大きな成果であると評価される。

ただし、本論文は、いま述べた諸特長と表裏をなすかたちで、いくつかの弱点をも抱えている。具体的に言うと、本論文は、禁欲的に叙述を既存の理解のメタヒストリカルな再検討と新出史料の精査に基づく運動史的記述とに限定する傾向が強い。新たに明らかになった事柄をどう意味づけようとしているのか読み取りにくい場合が間々ある。たとえば、前述した山川論の部分では、山川の思想にさらに立ち入りつつそれを当該期の思想空間のうちに位置づける、といったことがなされてもよかったであろう。また、帝国日本の支配秩序と国際共産主義運動との相克という観点をとって、コミンテルンの指導下での日本人・朝鮮人・中国人共産主義者の提携に着目した点は高く評価されるが、コミンテルンの極東政策の全体像や朝鮮人・中国人側の主体的要因が十分に明らかにされていないという点は、弱点として残る。しかしながら、これらの弱点は、これからの研究の発展のなかで解決されるべき今後の課題であるともいえよう。

以上の通り、本研究は、1920年代前半の日本に存在した第一次共産党について、国際的視野のもとその具体的あり方と歴史上の意義を研究したものであり、第一次共産党を重要な一環とする当該期の日本の社会運動、さらには当該期の東アジアの現代史について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、本審査委員会は、学位申請者の黒川伊織は、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。

なお、著者は、次の2点を含む複数の研究論文を公表している。

- (1) 黒川伊織「日本共産党『22年綱領草案』問題再考」、『大原社会問題研究所雑誌』第592号、2008年3月。査読付き。
- (2) 黒川伊織「1924年2月の日本共産党綱領草案」、『大原社会問題研究所雑誌』第608号、2009年6月。査読付き。

論文内容の要旨

氏名 黒川 伊織

専攻 人間文化科学

指導教員 宇野田 尚哉

論文題目 「第一次共産党」史論 ―帝国日本とインタナショナルのはざまで―

論文要旨

本研究の目的は、1921年に成立し、1924年に解党した「第一次共産党」の歴史を、インタナショナルな連関のもとで、さらには、インタナショナルと帝国秩序との相克という局面において実証的に跡づけ、これまで一国的枠組に切り縮められたかたちで論じられてきた歴史的経験を、第一次世界大戦後の世界的経験のうちに位置づけ直すことである。

第1部「「第一次共産党」史研究の脱構築」では、「第一次共産党」史研究を規定してきたこれまでの枠組がどのように成立してきたものであったのかを批判的に明らかにしたうえで、「第一次共産党」に対する視座の再構築を行った。

まず第1章「「第一次共産党」史のメタヒストリー」では、「第一次共産党」という呼称とその定義が確立したのは1930年代初頭の日本共産党公判闘争においてであり、この公判闘争の産物である市川正一『日本共産党闘争小史』が戦後「正史」としてひろく受け入れられていくなかで、「32年テーゼ」／講座派理論の枠組を前提とする「第一次共産党」理解が自明なものとして流布していったことを明らかにした。この第1章では、従来の「第一次共産党」史研究が、「32年テーゼ」／講座派理論の枠組を適応的に適用することによってなされてきたものであること、したがって、「32年テーゼ」／講座派理論をいったん括弧に括って20年代初頭の歴史的文脈のなかに置き直すかたちで「第一次共産党」は再度検討される必要があることを明らかにした。

第2章「唯物史観の受容と同時代認識」では、「第一次共産党」に対する視座の再構築を行った。具体的に言うと、堺利彦や山川均ら「第一次共産党」の代表的な理論家の場合に即して、唯物史観の受容過程とその日本史研究への適用過程を実証的に跡づける作業を通して、「第一次共産党」の理論家たちを1910年代後半から20年代前半にかけての歴史的文脈のうちに位置づけ直した。その結果、「第一次共産党」の理論家たちは、外来知としてのマルクス主義理論を受容し、それを日本史の研究や同時代の日本社会の分析へと適用して、唯物史観に基づく日本史理解と日本資本主義分析の観点からの同時代認識を構築した最初の思想家たちであったことを明らかにした。また、彼らが原内閣＝ブルジョア政権確立説と説明されるような同時

代の日本社会についての理解を抱いていたことを明らかにし、そのうえで「第一次共産党」が持った一連の綱領的文書にも検討を加え、日本社会の後進性を強調するコミンテルンの理論的立場との関係のなかで、原内閣＝ブルジョア政権確立説をとる「第一次共産党」の立場も一定の揺れを示したことを明らかにした。

第2部「インタナショナル・帝国秩序と「第一次共産党」」では、初期・中期・後期の三期にわけて、「第一次共産党」史を実証的に跡づけ直した。その特徴は、(1)従来当事者の自伝・回想録や官憲文書によってのみ描かれてきた「第一次共産党」史をコミンテルン文書によって描き直したこと、(2)コミンテルン文書を活用することによって、帝国日本の支配秩序とコミンテルンの介入との相克という観点に立ち、「第一次共産党」史の研究を一国的枠組から解放したことにある。

第3章「インタナショナルな連関のなかでの初期「第一次共産党」」では、朝鮮人密使を介したコミンテルンの介入に呼応しての近藤栄蔵の上海渡航と「第一次共産党」の成立、初期「第一次共産党」の国内における党活動の代表的事例としての暁民共産党事件、国外における党活動の具体例としてのシベリアにおける駐屯日本軍に対する反軍プロパガンダを具体的に明らかにした。また、コミンテルンによる極東への介入の組織的あり方を解明することによって、コミンテルンと「第一次共産党」とのあいだに直接的連絡の回路が開かれていくさまを明らかにした。本章では、「第一次共産党」の成立やその初期の活動は、コミンテルンによる極東への介入や、帝国日本の支配秩序に対抗しようとした朝鮮人や中国人の帝国内外を結ぶネットワークがあったはじめてあり得たものであったことを具体的に示した。

第4章「帝国秩序へのコミンテルンの介入と中期「第一次共産党」」のうち、その前半では、1922年8月に「政治運動への進出」を掲げて再組織された「第一次共産党」が、コミンテルンから「22年綱領草案」を与えられるなかで、「政治運動」の内実をめぐって党内に軋轢を生じさせていったさまを明らかにした。「第一次共産党」の主流は、原内閣＝ブルジョア政権確立説に立脚して、議会への進出を目指すような「政治運動」は現状のブルジョア独裁を強化することになると捉えて議会外での示威的「政治運動」を志向したのに対し、コミンテルンは、日本におけるブルジョア革命の未完性を強調してブルジョア議会への進出をめざす「政治運動」の必要性を強調した。そのようななかで、「第一次共産党」内には、議会への進出を目指す「政治運動」に否定的な主流派と、コミンテルンの意向を受けてこれに肯定的な反主流派が形成され、党内に軋轢が生じたことを明らかにした。1923年3月の石神井臨時党大会でコミンテルンから与えられた「22年綱領草案」が審議未了に終わったのは、この軋轢の象徴である。さらに、ここでは、その後の「第一次共産党」がコミンテルンの意を受けつつ全体として合法政党組織化に向かっていくさまを、当初からこれに肯定的であった反主流派の動きとくに注目しながら明らかにした。また後半では、〈極東の共産主義運動〉という枠組を前提となされたコミンテルンの介入への対応という観点から、「第一次共産党」や朝鮮共産主義運動／在日朝鮮人運動の動きを、とくにコミンテルンの介入のもとでの相互の連動という点に留意しながら跡づけた。初期「第一次共産党」と在日朝鮮人運動との間で〈東洋革命〉という理念が共有され、そのような理念を掲げながら両者の運動が連関性をもちつつ展開されていたことを明らかにしたうえで、朝鮮共産主

義運動が抱える内紛の調停をコミンテルンが「第一次共産党」に期待したことにより、「第一次共産党」と朝鮮共産主義運動／在日朝鮮人運動が不可避免的に連動せしめられたことを明らかにするとともに、関東大震災の影響と朝鮮共産主義運動／在日朝鮮人運動の変化により後期「第一次共産党」の時期には朝鮮問題が後景化していったことを明らかにした。

第5章「ウラジオストク在外ビューローと後期「第一次共産党」」では、1923年6月の第一次共産党事件以降、1924年春の解党に至るまでの後期「第一次共産党」の活動を、第一次共産党事件を契機として国内外に並立した執行機関それぞれの活動を踏まえつつ具体的に検討した。まず、ウラジオストクでコミンテルンの直接的指導のもと設立された在外ビューローが、第一次共産党事件によって打撃を受けた党を立て直すにあたって執行機関としての役割を担うよう期待されていたことを踏まえたうえで、党の立て直しのための具体的方法としてあらためて合法政党組織化がコミンテルンから在外ビューローに指令されたことを明らかにした。そして、在外ビューローより国内へと伝達された合法政党組織化の指令を受け入れた山川均を中心に第3回党大会が開催され、この大会を契機に国内では合法政党組織化に向けた具体的活動が本格的に進められるようになったことを明らかにした。また、第3回党大会ののち、国内では「第一次共産党」の合法政党組織化に向けた動きがのちの合法無産政党の母体である政治研究会誕生の一つの背景となったことを明らかにし、最後に、「第一次共産党」に当初からはらまれていた対立が、第一次共産党事件を契機とする在外ビューローの成立によってさらに深刻化し、最終的には国内の旧世代・水曜会系党員の主導のもと、国外の新世代・曉民会系党員を置き去りにするかたちで解党がなされ党内対立の清算が図られたことを明らかにした。

以上を踏まえた本研究の成果は、以下の四点である。

(1)これまで自伝・回想録や官憲文書のみによって描かれてきた「第一次共産党」史を、新出のコミンテルン文書(日本共産党ファイル)によって描き直した点である。これまで断片的にしか知られていなかった「第一次共産党」の具体的活動が、本研究により、「第一次共産党」の活動の一環としてその歴史のうちに一貫性のあるかたちで位置づけられた。そして、本研究は、これまで一国的枠組のなかで捉えられてきた「第一次共産党」の活動が、コミンテルンからの介入という契機を抜きにしては理解できないということを実証的に示したのである。

(2)帝国日本の支配秩序とそこに介入する国際共産主義運動との相克のなかに「第一次共産党」を位置づけ、その歴史的意義を解明したことである。コミンテルンは、「極東」という地域概念に基づいて日本・朝鮮・中国などへの介入を行っていたわけであるが、この「極東」は帝国日本の勢力圏と大幅に重なっていた。そのため、帝国の中枢としての日本へのコミンテルンの介入は、帝国日本の支配秩序に抵抗しようとする朝鮮人・中国人密使たちによって担われることになったし、「第一次共産党」はコミンテルンから在日朝鮮人運動との提携や朝鮮共産主義運動が抱える問題への積極的関与を求められることになった。本研究では、前述したコミンテルンからの介入も「第一次共産党」による対応も帝国日本の支配秩序への対抗ということを見据えながらなされていたということを示したのである。

(3)日本資本主義論争の前史として顧みられることがなかった外来知としての唯物史観の受容過程と、それが日本史の研究や同時代の認識に適用されていった過程とを、はじめて具体

的に跡づけたことである。先行研究において「第一次共産党」は絶対主義的な天皇制支配と闘ったものとされてきたが、本研究では、「第一次共産党」が、同時代の日本社会を、立憲君主制下でブルジョアジーが政治的権力を掌握しているブルジョア独裁の社会と捉えており、彼らはそのような同時代社会の認識に基づいてその革命戦略を構想していたことを示したのである。

(4)「第一次共産党」が、非合法共産党の源流であるばかりでなく、合法無産政党の源流でもあることを、実証的に示した点である。「第一次共産党」が1920年代半ば以降の社会主義勢力の源流となったことは、たとえば「第一次共産党」の理論的指導者であった山川均がのちに共産党を離れ労働派・社会主義協会の指導者となったという事実からも容易に了解されるが、本研究では、「第一次共産党」の工作が政治研究会の成立に一定の役割を果たしたという事実を実証的に明らかにし、このような系譜を、思想・運動上の系譜としてたどる作業の出発点を示したのである。

今後の課題は、以下の三点である。

(1)史料面で、自伝・回想録や官憲文書とコミンテルン文書とを子細に突き合わせた研究を行っていくという課題。

(2)1920年代半ばから30年代にかけての思想史・運動史研究上の課題。これは以下の三点に分類できる。①「第一次共産党」解党後の非合法共産党の系譜を運動史的にたどる、という課題。②「第一次共産党」をその源流の一つとして合法無産政党が生まれていくさまを、コミンテルン文書をも参照しながら明らかにするという課題。③「第一次共産党」の思想的営為をのちの日本資本主義論争の文脈に接続するという課題。

(3)1945年から50年代にかけての思想史・運動史研究上の課題。1920年代初頭は、コミンテルン日本支部として日本共産党が成立し、国際共産主義運動の一翼を担うかたちで日本共産主義運動が始まった時期であるが、この時期は、その後1955年まで続く日本共産主義運動の枠組が成立した時期でもある。コミンテルン第4回大会では日本に在留する朝鮮人共産主義者は日本共産党の一セクションを構成すべきであると決定されたが、このような考え方は、1920年代後半に至って在日朝鮮人組織の日本側の組織への合流といったかたちで現実のものとなっていった。そして、敗戦後に日本共産党が再建された後も、日本に在留する朝鮮人共産主義者は日本共産党の一セクションを構成した。コミンテルンの介入のもと帝国の中枢に形成された抵抗の枠組が帝国解体後も持続したと言えるのであり、この枠組が組み替えられるのは、日本人の共産主義運動と朝鮮人の共産主義運動とが組織的に分離される1955年のことである。

本研究では、コミンテルンの介入のもとこのような枠組が成立してくる最初の局面を明らかにしたわけであるが、日本の敗戦／朝鮮の解放を経て朝鮮戦争下までもこの枠組はいかに維持されたのか、そして最終的にはどのように組み替えられていったのかを明らかにすることは、本研究から導かれる今後の課題のうち、最も重要なものである。帝国に抗する共産主義運動として始まった20年代以来の運動の経験を、帝国の共産主義運動の経験として捉え直すためには20年代の枠組が50年代に組み替えられていくさまを明らかにすることが不可欠である。今後はそのような作業を経由しながら、20世紀日本における共産主義運動の帝国経験を総体として描き出す作業に取り組んでゆく。